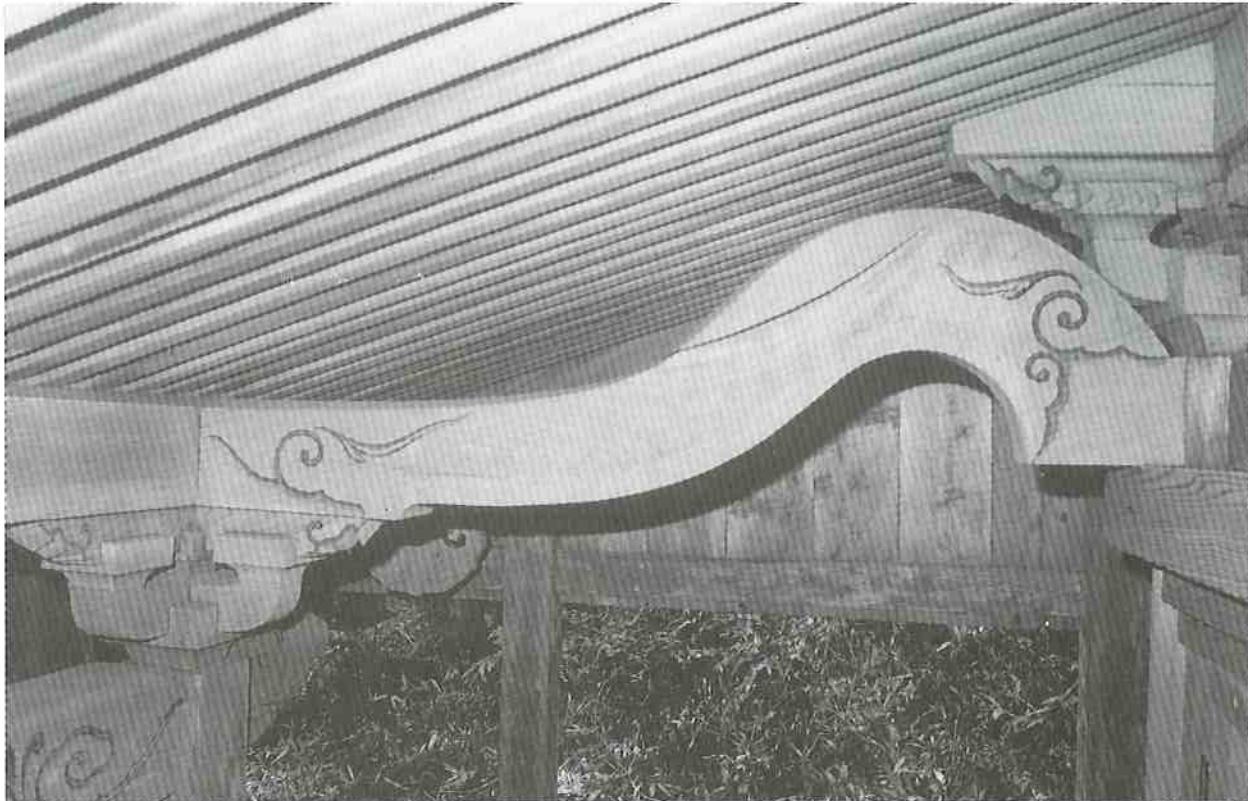


か も 市 史 だ より

平成13年3月

No.3

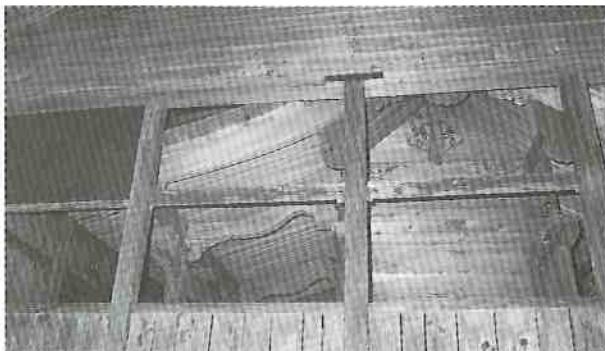
■編集発行 加茂市幸町2丁目3番5号 加茂市教育委員会市史編さん室 ☎0256(52)0080 内線480



▲日吉神社本殿 洗練された曲線を持つ海老虹梁



▲嶽山寺観音堂



▲日吉神社本殿の妻面

加茂市の社寺建築調査

私は文化財部会で建造物を担当しています。新潟県発行の「宗教法人名簿」によると、市内で八十五件の法人があります。その他に創立・沿革を記した資料も私の手元にあります。が、建造物そのものの資料は無いに等しいのです。よつて私は建物全数の現地確認を行ない、その中で建立年代、様式、構造、保存度等の観点より詳細な調査対象とすべき建造物を選び出す作業をすることとしました。その作業は現在も続行中で約半数の四十件は調査済です。

その中で気付いたことは、予想外に古い年代（江戸初期に近い）や高い意匠性をもつ建造物が多いことです。下高柳地区にある日吉神社の建造物群、特に本殿は集落の産土神としてのレベルをはるかに越えた高い洗練さを持ち、かつその意匠は骨太な部材と古風な絵様とあわせて多分に中世的な雰囲気を持つています。ちなみに本殿には、寛延二年（一七四九）と記載されている上棟札もあり貴重です。その他、宮寄上地区にある嶽山寺の観音堂は荒々しい意匠ながら十七世紀の建造を思わせるものです。今後の調査が楽しみな市史編さん事業であります。

近世初期の北潟村の開発

須田地区の北潟村の発展の足跡を示す新資料が発見され、近世の村の姿を解明する作業が進んでいます。

現在進めている加茂市史編さん事業では、旧『加茂市史』で拾いあげることのできなかつた新しい史料をできるだけ見いだすことに努めています。近世部会では昨年秋に現在佐渡郡相川町に住んでおられる旧北潟村名主家の小林誠悟氏所蔵文書の調査・採集を行ないました。加茂地区にはめずらしい近世初、前期の文書が比較的まとまって残されておりました。

北潟村は、近世期を通じて新発田藩領でした。信濃川の左岸の自然堤防上に立地し、南は後須田、東は古川新田（白根市）と接する位置にあります。「小林家家譜」によれば、小林家の元祖を弥五郎（廣重）といい、須田大炊助に仕えた侍でしたが、上杉時代の永禄七年（一五六四）に荒地二十町歩の開発許可を得て帰農、従者の五助・織原傳右衛門・鎌田兵助・勝本伊之助・山口安右衛門の七家とともに村を切り開いたと伝えていました。小林家を中心としたこれら八家が北潟村の草分け（初期本百姓・本家）と



▲小林家文書

北潟村の開発が進むのは寛永年間からです。元和七年（一六二一）の年貢が十二石余だったものが寛永元年（一六二四）には倍増して二十二石となり、同五年にさらに四十二石余となります。この頃戸数は二十数軒に膨れあがります。つづく寛永末期から慶安期にかけても大規模な開発が行なわれます。特に寛永二十年（一六四三）と翌正保元年には藩の足軽衆がやつてきて開発した「御長柄開田」が北潟から後須田にかけて四町八反余も開かれます。「長柄開き」の年貢米は、足軽衆の給与に供されるのですが、この後、承応元年（一六五二）にも五町歩の長柄開田が行なわれています。北潟村の新田開発はこの藩の足軽衆による開発を特徴としています。こうして正保三年（一六四六）に領内一斗余の村として確定します。

開発には、隣村との境界を決めることが必要です。北潟村は正保二年（一六四五）に延宝八年（一六八〇）領内一川新田とも起こしていきます。川新田と申しまして、これは水田は二十五町三反余、年貢は百三十四石余を納入する村となっています。

北潟村の特徴のもう一つは、このように近世の村の姿を知させてくれる小林家文書は大変貴重な資料です。

▲「元和二年上北方村新田開発免状」3反の開発地を3年間年貢免除するという鐵下年季を申し渡したもの

「御判田」とよばれる藩の家臣の手作り田が設定されたことです。承応元年（一六五二）「北潟村指出し」によれば堀主馬助・泉徳左衛門・小川小伝次の合計一町三反分が確認され、このうち泉・小川家のものは延宝八年までに絶家で消滅しますが、堀家の御判田（七反余）は幕末まで継続します。そして、これらの管理は野地をめぐる訴訟はこののち寛文四年（一六六四）真木新田（白根市）、同十一年に古賚に作成された「御領内本田高付帳」通り村高百十三石六斗余の村として確定します。

このように近世の村の姿を知させてくれる小林家文書は大変貴重な資料です。

か も 私 史

今朝も私は何時もと同じく心の中でお釈迦様を念じ、張り切つて幼稚園へ出掛けます。縁あって私が加茂に参りましたのは終戦後まだ世情混沌としていた昭和二十四年（一九四九）でした。教育界はアメリカのG.H.Q.によつて教育体系、内容が激変しましたが、幼稚園は教育基本法第一条で「この法に云う学校とは幼稚園から大学迄を云う」としつかりと位置づけられ、教育内容が示されるのはこの後二十六年（一九五二）であります。

加茂に嫁ぐことになったのは、私の児童好きが評判だったというのも一因です。又時の園長西村大串の発病などにより、真に関わり始めたのは昭和二十六年度からで、それ以来五十年を数えることになります。当時の園は現在とは大きく異なり、教育改革について、星高等学校と名称を変更し

ました。洗い水は加茂山の沢の水を竹の桶で引いて使用していましたが、雨が降ると木の葉で桶がつまつて水がこなくなり、山まで行つて掃除するのが常でした。又戦争前には加茂川で洗い物をしたと聞いており、加茂川もきれいな水



加茂葵幼稚園 との出会い

西村 紗



▲園児の集合写真（戦争中のもの・外山美代志氏蔵）

酒造りの 伝統を担つて



雪椿酒造株式会社
会長 小柳 荘

たばかりの旧朝中学校生徒と幼な子が、保育室や運動場を譲り合うような生活でした。園長としての教育方針は今も変わらず「児童の生活の基に宗教的情操を養い、身心の発達に適当な環境を用意する」であります。

その頃の大昌寺は修行僧も二十名近く居ましたので私の多忙も極まつたと申してもよ程でしたが、その落着きのない心を救うのは素直で無邪気な園児達との生活でした。その後暁星高校は現在地に移りましたので今では楽々と思うよう遊べます。各領域に於いて目を見張る程伸びてくれる園児たちです。

「よーし、今日は張り切つて！」これが出勤時の掛け声なのです。

私の所では、仕込み水は山重様の前に加茂山から出てくる谷の清水井があり、荷車やカートに桶をのせて運んだも

太平洋戦争の始まる前に九軒あった蔵元が、戦時中の企業整備等幾多の変遷を経て現在の三軒になつてしまつてから四十五年になります。加茂では何時頃から商売として酒造りが始まられたのか、詳しいことは判りませんが、日本では、天平二十年（七四八）に万葉集に酒屋と詠われているから、この頃が始めではないかと思われます。又、中世的酒屋を商人として安定するには十二世紀末と云われています。加茂では文化三年（八〇六）に、加茂町の酒造り人が上条村喜右衛門の酒蔵に乱入したと記録にもあり、現に私の所も文化三年の創業であるので、それ以前に酒屋があつた事が判ります。

加茂で上水道が出来て給水開始されたのが昭和三十二年（一九五七）九月一日であり、それまでは各自が井戸を使用していました。

◆昭和38年頃の酒造りの様子



① 蒸した米を冷ましているところ



② 蒸した米に麹菌を繁殖させて麹を造る作業

水を竹の桶で引いて使用していましたが、雨が降ると木の葉で桶がつまつて水がこなくなり、山まで行つて掃除するのが常でした。又戦争前には加茂川で洗い物をしたと聞いており、加茂川もきれいな水が流れていたのでしょうか。



③ ②と同じ作業だが、半日ほど経って麹がより白く細やかになっている

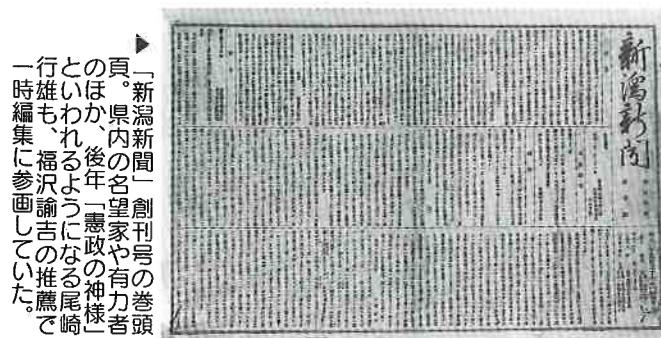


④ タンクの中へ酒を仕込んでかき混ぜる櫻入れの作業

のです。雪が降るとソリに凍れますが、それがいつばいで苦労しました。洗い水は加茂山の沢の水を竹の桶で引いて使用していましたが、雨が降ると木の葉で桶がつまつて水がこなくなり、山まで行つて掃除するのが常でした。又戦争前には加茂川で洗い物をしたと聞いており、加茂川もきれいな水が流れています。

太平洋戦争の始まる前に九軒あった蔵元が、戦時中の企業整備等幾多の変遷を経て現在の三軒になつてしまつてから四十五年になります。加茂では何時頃から商売として酒造りが始まられたのか、詳しいことは判りませんが、日本では、天平二十年（七四八）に万葉集に酒屋と詠われているから、この頃が始めではないかと思われます。又、中世的酒屋を商人として安定するには十二世紀末と云われています。加茂では文化三年（八〇六）に、加茂町の酒造り人が上条村喜右衛門の酒蔵に乱入したと記録にもあり、現に私の所も文化三年の創業であるので、それ以前に酒屋があつた事が判ります。

加茂での酒造りの中で忘れないのが昭和三十八年（一九六三）の豪雪です。くる日もくる日も雪が降り続き、酒蔵が潰れるのではないかと思う程で、その恐怖心から仕込を中断したことや、七谷の奥地まで三斗の酒（一升びん三十本）をソリに積み、三人で一日がかりで配達したことなど思い出はつきません。



▶「新潟新聞」創刊号の巻頭
頁。県内の名望家や有力者とのほか、後年「憲政の神様」といわれるようになる尾崎行雄も、福沢諭吉の推薦で編集に参画していた。

虫メガネ片手に鉛筆を走らせる。

昆虫や植物のスケッチの話ではありません。全部で十名ほどの委員が毎月三日間程度、新潟市女池にある新潟県立文書館の一室で、こんな姿をさらしながら調査に励んでいるのです。そして視線の先には、細かな字でギッシリと紙面が埋められた「新潟新聞」があります。

明治十年四月、県内で最初の本格的な日刊紙「新潟新聞」が創刊されました。現在、創刊時からのまままったく形では唯一東京大学に残されているだけという貴重な資料です。県立文書館はマイクロフィルム化されたものを購入・印刷して閲覧に供していますが、この「新潟新聞」に掲載されている加茂市に関係した記事を、一昨年から近現代部会と市内在住の委員が中心になって調査しています。

これまで近現代部会では戦前戦後の世相を探る様々な資料の調査収集に励んできました。ですがその一方で、資料が集まり史実の一端に近づけば近づくほど、散逸してしまった。今までの歴史的資料が惜しまれてならないのです。

今となつては二度と戻ることのないこうした資料を正確に補えるものなどもちろんありませんが、幅の広い対象を扱う日刊新聞という性質上、「新潟新聞」は往時の様子を伝えてくれます。

多くの委員は既にこうした作業を経験済みでしたが、未

の本格的な日刊紙「新潟新聞」が創刊されました。現在、創刊時からのまままったく形では唯一東京大学に残されているだけという貴重な資料です。県立文書館はマイクロフィルム化されたものを購入・印刷して閲覧に供していますが、この「新潟新聞」に掲載されている加茂市に関連する記事で最初期のものひとつ。明治十二年一月二十八日付。

経験の者にとっては当初、明治の一時期に県内を大小の区に分けて行政区を示した「大区小区制」による表記に戸惑つたり、現在の新聞記事と余りに違う漢語調と滑稽な調子を使い分けた文体に悩まされたり・・・となかなかはかりませんでした。さらに、小さすぎるくらいに小さな文字と不鮮明な印刷が読み取りにくさを助長します。ですが、慣れるにつれて作業は着々と進展し、創刊から明治末年までの三十五年分ほどの新聞から、三千八百を越える加茂市に関係した記事を集めることができました。その後も収集記事は増え続け、当面の目標である昭和二十年までの調査を終えた暁には、一万項目に近い資料が集まる見込みです。

古い文書や写真はありますか

市史の編さんには、一にも二にも古い時代の資料が欠かせません。和紙に書かれたよ

うな古い文書はありませんか。墨で字の書かれた木片などが

ご自宅に残されていませんか。

市史の編さん事業も発足から

丸二年が経ちました。この間

市内外の多くのみなさまから

資料や情報の提供を受けまし

た。ほんとうにありがとうございました。

調査はまだまだ続きます。今後ともみなさまの一層のご協力をお願いいたします。

古新聞や！

近現代部会の調査から

部会長会議の風景

加茂市史編集委員会では

日頃の調査活動のほか、折に触れ調査の進捗状況の相互通報と円滑な事業の伸展を期して会議を開いています。昨年暮れには各部会の責任者が集まり、第四回の部会長会議が開かれました。

これまでに多くの研究を重ね、さらに幾多の事業に参画した経験を持つ各委員は字句の表記方法や本の体裁ひとつとっても一家言持つていて、会議は和やかな雰囲気で運営されています。このたびの会議も進行されました。



▲昨年12月に行われた会議の様子。昼下がりに始められたが、外はもう日が暮れようとしている。